BOOK IX — 自由の代償

第08章 — 不均衡な戦い

01 — 降伏の条件

屋根付きの連絡通路にいた士官が、ロイに両手を上げるよう求めた。ゆっくりと話し、ロイが従わないと、同じ指示を繰り返した。背後では、未完成の屋根から雨が降り込み、放置された医療機器を覆うビニールシートを打っていた。

レイチェルは、怪我を悪化させずに右腕を肩より高く上げることはできないと説明した。士官は通信機で誰かに確認し、それから両手を見える位置に置いておくようロイに告げた。

「彼女はどうなる？」とロイは尋ねた。

「彼女は今回の命令の対象ではない」

灰色のコートの女が廊下の端まで来ていた。そこで立ち止まり、士官に話を任せていた。

ロイは、自分の手首をつかんだM-04の手の重みを思い出した。抵抗できたのはほんの一瞬で、その見知らぬ男に決着をつけられてしまった。女の能力が彼より劣ると考える理由はなかった。

「どこへ連れていく？」

「軍の医療施設だ」

「どれくらいの間？」

士官は、移送の期間について話す権限は与えられていないと答えた。

診察室から、使い捨ての医療器具が入った箱を抱えた病院職員が出てきた。兵士たちを見ると謝り、部屋に戻ろうとした。士官は、呼ばれるまで中にいるよう告げた。彼女は何が起きたのかも聞かずに姿を消した。

レイチェルはコートから折り畳んだ診療記録を取り出した。

「主治医は移送を認めていません。異議申立書の写しもお持ちでしょう」

「私が従っているのは、その命令ではない」

ロイは彼女の手にある書類を見た。一日中、人々は記録を作成し、異議を申し立て、説明を求めてくれていた。それをありがたいと思った。今もそう思っていた。しかし六メートルほど先に立っている男の任務は、そうした努力のすべてが効力を失ったところから始まるのだった。

士官はレイチェルに、ロイから離れるよう求めた。

彼女は動かなかった。

ロイには病院の柵の向こうの道路が見えていた。その先のどこかで、人々は夕食をとり、配達を待ち、仕事から帰宅している。三階のアパートの明かりが見えた。カーテンの向こうを人影が横切った。

士官は指示を繰り返した。

ロイは左手を下ろした。

「断る」

02 — 灰色のコートの女

女の最初の動きはあまりに小さく、ロイは姿勢を変えただけだと思った。彼女が近づいてきたと気づいたのは、二人の間の距離がほとんどなくなったときだった。

女は彼の左腕に手を伸ばした。ロイはつかまれまいと、ハヴェルと戦ったときと同じように身体をひねった。一瞬、うまくいったと思った。次の瞬間には彼女の手が前腕をとらえており、自分の身体がどの方向へ動くかを、もはや自分だけでは決められなくなっていた。

背中が壁に激突した。

衝撃でコートの下の包帯がずれた。右肩から腕にかけて激しい感覚が走り、どこまでが負傷箇所なのかさえ分からなくなった。女は彼が倒れる前に手を放した。

「立っていなさい」と彼女は言った。

レイチェルが士官に何かを訴える声が聞こえたが、言葉までは聞き取れなかった。女はロイの両手を見ていた。もう一度彼を拘束する必要があるかどうか、見定めているようだった。

ロイは、驚くほど無駄のない動作からハヴェルが生み出していた力について研究していた。力積、身体の均衡、力の伝達の関係は、一週間前よりも少し理解できていた。だが、それを確実に再現する能力はまだ身についていなかった。

それでも女が再び近づくと、試してみた。

ほんの一瞬、動きは正しいように感じられた。足の位置が定まり、左腕は力積を先導するのではなく、その後を追っているようだった。普通の相手なら、その一撃で離脱するためのわずかな時間を稼げたかもしれない。

女は身をかわした。

ロイの手は何にも触れなかった。女の手が彼の胸を打った。

ロイは片膝をつき、なんとか身体を支えたまま、歯の間から息をした。女の一撃は、全力と呼べるようなものではなかった。勝とうとしている相手と、勝敗が不確かだなどと一度も考えたことのない相手の違いが、ようやく分かり始めていた。

レイチェルが二人の間に入った。

「彼の腕を見て」

女は目を向けた。ロイの肘の近くで衣服に血がにじんでいた。彼女は通信機に向かって話し、医療要員を要請した。

ロイは彼女を見上げた。「あいつらが俺に何をするか、知っているのか？」

女は数秒間、彼を見つめた。

「あなたを引き渡すよう指示されています」

肯定でも否定でもなかった。彼女は、それで質問に答えたつもりのようだった。

かつてのロイなら、二人の違いは命令に従う者と拒む者の違いだと理解しただろう。今は、それほど単純な違いだったことが一度でもあるのかと考えていた。

03 — 演習の外側

管理棟では、ヴェイル大佐が診断棟から送られた映像を見ていた。別の映像には病院の外の道路が映し出されていた。数台の民間車両が隣接地区へ迂回させられ、市の交通管理当局が交差点の通行再開を求めていた。

ヴェイルは部下に、交通管理当局へ見通しを伝えるよう指示した。ただし、確約と受け取られるものであってはならなかった。

デレンはテーブルのそばに立っていた。別の画面では、病院の医務責任者が、ロイの負傷のため実力行使にはとりわけ危険が伴うと説明していた。ヴェイルの側の医師は説明を聞き、診断画像の原本がどこにあるかを尋ねた。

「もう提供してあります」とデレンは言った。

医師は彼を見た。「私のところにはありません」

デレンは参照番号を伝えた。

確保部隊には、回収が不可能となり、対象が十分に重大な脅威をもたらす場合、致死的な実力を行使する権限が与えられていた。その文言は現場の士官に一定の裁量を認めるものだった。デレンは作戦開始前に読んでいた。さらに、生存可能な生体材料の回収を重視する、別の指示にも目を通していた。

作戦がこれ以上長引いたとき、二つの指示がどうすれば両立し続けるのか、彼には分からなかった。

ヴェイルは第二の機密指定部隊の状況を尋ねた。部下が、隊員たちは配置についていると報告した。大佐はそれを確認し、病院の地図へと視線を戻した。

デレンは軍歴の大半を、作戦を計画どおりに進めようとする士官たちを見て過ごしてきた。ヴェイルの部下たちは、個々の行動の成否にはさほどこだわらないようだった。一つの行動が失敗しても、別の行動が進行中か、すぐに開始できる状態にあった。計画は一度の対峙に依存していなかった。

「対象はまだ建物の中にいます」とデレンは言った。「そこでイマニに治療させてはどうですか？」

「我々には、彼を連れ出す命令が下っている」

「負傷の程度によっては、それが不可能になるかもしれません」

ヴェイルは画面から顔を背けた。

「そうなったときに対処する」

対処するとは具体的にどういう意味なのか、一瞬デレンは尋ねようと思った。だが、やめた。答えは、すでに読んだ指示の中に含まれている可能性が高かった。

一階では、サトウ軍曹が病院の搬送係とともに、受付を通って担架を運んでいた。担架には意識のない患者が横たわっていた。搬送係は彼女に、通過する際、酸素ボンベを扉の枠にぶつけないようにしてほしいと頼んだ。

サトウは扉を通り抜けるまでボンベを支えた。廊下に戻ると、診断棟が一時的に軍の管理下に置かれたことを知らせる放送が流れた。

搬送係は彼女を振り返った。

「ほかの場所も、もうそうなっているでしょう？」

04 — 第二の措置

床に座っていると、ロイには雨の音がいっそうはっきり聞こえた。傷んだ屋根の下を水が流れ、診察台の車輪の近くにたまっていた。台の脚から紙のラベルが剥がれ、水に浮かんで流れていくのを見ていた。

灰色のコートの女は医療要員を待っていた。士官はレイチェルに、向かいの壁際に立つよう命じていた。彼女は、ロイが立てるようになるまでは従わないと拒んだ。

ロイは立ち上がろうとした。左脚は身体を支えたが、突然、右半身から力が抜けていった。彼は壁にもたれて座り直した。

レイチェルは彼のそばにしゃがんだ。

「まだ立とうとしないで」

自分が望んだからといって、出力制限がなくなるわけではないことは分かっていた。研究室の人々が得た知見が、彼を強くしたわけでもない。なぜ力が出ないのか、その理由の一部が理解しやすくなっただけだった。

レイチェルの向こうに、連絡通路を歩いてくるM-04の姿が見えた。

その後ろには兵士たちがいた。一人は医療機器のケースを持っていた。ほかの二人はロイより奥に目を向け、閉鎖された診療室の出入口を見ていた。

M-04は女と短い言葉を交わした。それからロイに近づき、介助なしで立てるかと尋ねた。

「断ったらどうなるのか、教えてくれてもいいだろう」

「移送は続行されます」

ロイは目を閉じた。中庭では一人の男に止められた。今は、身体能力でかなわない相手が二人、ほとんど目も向けていなかった兵士が数人、さらに外の物音から存在を推測するしかない要員がいた。

彼は軍を、大勢の敵の集まりとして想像していた。それは間違いだった。軍とは、彼が一つの場所でどう行動するかをまだ決めかねている間に、いくつもの場所で行動できるものだった。

レイチェルは医療担当の兵士に、移動させる前にロイを診てもらえないかと尋ねた。男はケースを開いた。包帯の状態を心から心配しているように見えたが、ロイを搬送できる状態にするよう求められている、と答えた。

「搬送の準備をするの？　それとも治療するの？」

男はためらった。

診断棟のどこかで、何かが割れる音がした。仮設の天井の一部がたわんだ。そこから水が噴き出し、石膏の破片が続いた。連絡通路に最も近い部屋の照明が消え、再びついたかと思うと、また消えた。

仕切りの向こうから悲鳴が上がった。

落下した天井材が病院職員に当たったのだった。士官は声のした方を向いた。医療担当の兵士はケースをつかんで、彼女を捜しに向かった。

ロイは、灰色のコートの女が負傷した職員の方を見ていることに気づいた。指示を待っているのか、それとも自分で何かを決めようとしているのか、判断できなかった。

やがて彼女はその部屋に入っていった。

05 — 報告すべき勝利はない

職員には意識があった。天井から落下したパネルの下に足首が挟まれていた。医療担当の男が彼女に話しかける間、二人の兵士がパネルを持ち上げようとしていた。灰色のコートの女は、二人が持ち上げられない部分へと向かった。

レイチェルはロイのそばに立った。二人とも何も言わなかった。

ロイは左腕を使って立ち上がった。M-04が一歩近づいた。中庭で受けたような衝撃には、もう一度耐えることはできないと分かっていた。

建物のどこかで警報が鳴り始めた。移動制限を告げていた放送は、天井の崩落があった部屋から職員に避難を求める放送に切り替わった。搬送係が患者を車椅子に乗せて現れた。兵士たちを見ると立ち止まった。

レイチェルは彼を呼んだ。

「ここから出る別の道はありますか？」

搬送係は奥の扉を指さした。その先の通路は、工事業者が建物に機械を運び込めるよう開けてあったという。今も開いているかどうかは分からないと言った。

士官は、作戦を妨害することは許されないとレイチェルに告げた。彼女は、それよりも搬送係が患者を移動させるのを手伝ってほしいと頼んだ。

ロイは壁から離れた。

M-04が彼をとらえた。

痛みは瞬時に走った。ロイには、打撃を放とうと身構えた記憶がなかった。覚えているのは打とうとした意思と、その後、動かすことのできない位置で腕を固定された感覚だけだった。

「抵抗をやめてください」とM-04は言った。

ロイは男の顔を見た。その表情は変わっていなかった。そもそも戦いに臨んでいるようにも見えない相手に敗れることには、何か耐えがたいものがあった。

そのとき、車椅子の患者が悲鳴を上げ始めた。崩落によって天井の別の部分が外れ、搬送係は車椅子をそこから引き離そうとしていた。M-04がそちらを向いた。

ロイは腕にかかる圧力が弱まったのを感じた。もう一撃を加えようとはしなかった。自分にも打撃を放てることを証明することには、もはや関心がなかった。

レイチェルは彼のコートをつかみ、扉の方へ引いた。ロイは彼女についていった。

背後で搬送係が助けを求めて叫んだ。再び重い物音がした。ロイは一度だけ振り返り、崩れた天井の下にM-04が立っているのを見た。搬送係が患者を移動させる間、彼は天井の一部を持ち上げて支えていた。

レイチェルに扉の向こうへ引かれたあとも、その光景はロイの脳裏に残った。

あの男に勝ったわけではない。男にはただ、別のことをする必要が生じたのだ。

06 — 壁の向こうの道

奥の扉の先の通路は、ほとんど真っ暗だった。ロイとレイチェルはそこを進み、改修工事のために病院の古い境界壁が撤去された場所にたどり着いた。その向こうには未完成の設備棟と、工事業者の無人の車両が何台か並んでいた。

レイチェルはロイを低いコンクリートの段に座らせた。コートを開き、包帯を調べた。その下がどれほど傷ついているのかは分からなかった。重要なのは出血だけではないということは理解していた。

「指の感覚はある？」

ロイはゆっくりと指を動かした。そのうち二本は、ほかの指ほど思いどおりに動かなかった。

彼女はイマニから教わったとおりに包帯を固定した。終わっても彼の前にひざまずいたまま、両手を自分の腿の上に置いていた。

ロイは道路を見た。建物の隙間を軍用車両が通過した。それが見えなくなるのを待ったが、反対方向からもう一台が現れた。

「ここにはいられない」

レイチェルはうなずいた。

二人はかなりの苦労をしながら、残りの工事区域を横切った。雨は二人の姿をほとんど隠してはくれなかった。高架道路の照明が濡れた地面を照らし、遠くの建物の間にはときおり移動する光が見えた。

設備棟の端で、狭いひさしの下に集まって待っている人々を見つけた。病院の入口から退去するよう指示され、戻ることができるのか確かめようとしている人々だった。一人の男は母親に届けるつもりだった食べ物の袋を持っていた。女が電話で、誰かに遅くなると伝えていた。

ロイが足を引きずっている理由を尋ねる者はいなかった。

レイチェルは袋を持った男に、雨を避けて座れる場所が近くにないかと聞いた。男は工事区域の向こうにある公共コンコースを指さした。店もあるが、まだ営業している店があるかどうかは疑わしいという。

二人は礼を言い、そちらへ歩いていく人々に加わった。

頭上を航空機が地区の端から端まで飛んでいった。ロイは、レイチェルが握る手に力を込めるのを感じた。

自分のような身体で何ができるのか、何年も考えてきた。今では、片手に傘を、もう片方の手に買い物袋を持つ年老いた男についていくことさえ難しかった。

男は二人を先に通そうと立ち止まった。

ロイは彼にも礼を言った。

07 — 終わりのない作戦

ヴェイルが天井の崩落についての報告を受けたとき、部下の一人は移送の書類を仕上げているところだった。対象の所在は、もはや確認できなくなっていた。

機密指定要員からの報告は異例なほど短かった。建物の構造部分の崩落によって作戦が中断され、その間に民間人の負傷者二名への救助が必要となった。対象は現場を離脱。M-04は医療班の到着後、任務に復帰した。

ヴェイルは現場にいた士官の名前を求めた。崩落の記録も要求した。M-04がどれほどの時間、天井を支えていたのかは尋ねなかった。

デレンはテーブルの向こう側で報告を聞いた。負傷した職員が病棟に搬送されたかを尋ねた。

「はい」と部下の一人が答えた。「治療を受けています」

大佐に統合参謀部から連絡が入った。彼による状況説明には、負傷した職員にも、車椅子に乗っていた患者にも触れられていなかった。確保は中断されたが、当初の現場の外に範囲を広げて継続中だと説明した。

通話が終わると、デレンは病院に通常業務を再開することを認めるべきだと提案した。

ヴェイルは、作戦に不要となった区域から軍の要員を撤収させることには同意した。しかし病院に施設の独立した管理権を戻すことには同意しなかった。

ほどなくサトウ軍曹が管理棟にやってきた。袖は濡れ、制服の片方の膝には埃がついていた。医療班が負傷した職員を搬送するのを手伝っていたのだ。

彼女はデレンに、ロイが敷地の外へ出るのを目撃した者はいたかと尋ねた。

「居場所は分からない」

「では、ここでの作戦は終わりですか？」

デレンは新しい指示を見せた。地区における作戦の範囲は拡大されていた。ほかの交通管理当局や公共機関にも、対象に関する通知が送られることになっていた。

サトウは最初の段落を読んだ。民間人による援助に関する箇所に至ると、その表情が変わった。

「それでは、病院の半分が対象になりかねません」

「分かっている」

古い診断棟では、病院の保守作業員が損傷の調査を終えるまで、M-04が崩れた天井の開口部のそばに立っていた。灰色のコートの女は医療班とともに立ち去っていた。士官が近づき、次の任務を伝えた。

M-04は了解した。

保守作業員が、怪我はなかったかと尋ねた。レプリカントは怪我はないと答えた。男は彼のしたことに礼を述べ、建物の調査に戻った。

M-04は作業員が話し終えるまで待った。それから士官の後について外へ出た。

08 — もう一時間の代償

公共コンコースは病院よりも寒かった。店の半数は閉まり、通路の暖房も夜間のため停止していた。小さな飲食店の無人のテーブルの間を、清掃機が動いていた。

ロイはバスの出発時刻を表示する画面の下にあるベンチに座った。数分ごとに新しい通知が現れた。北部地区への便は運休、あるいは経路が変更されていた。乗客には、移動を続ける前に交通管理当局に確認するよう促されていた。

レイチェルが店から水と簡単な包帯の入った袋を持って戻ってきた。市内のほかのどこで買うよりも高い金額を支払っていた。

彼女はロイの隣に座り、二人の間に袋を置いた。

「あなたが休める場所を探さないと」

ロイは少し水を飲んだ。左手がまた震えていた。

診断棟で見たことについて彼女に話した。レイチェルは彼が話し終えるまで聞いていた。

「あいつは俺を拘束し続けることもできた」とロイは言った。「天井が落ちてきても」

「そうかもしれない」

「でも、そうはしなかった」

レイチェルは出発時刻の画面の下で待つ人々を見た。「彼には二つの選択肢があったの。なぜもう一方を選んだかは分からない」

ロイはその言葉を考えた。あの出来事を自分の勝利の物語にするつもりなどなかった。機密指定されたレプリカントたちは、彼を制止する能力があることを繰り返し示していた。その夜の自分の行動には、そうでないと考える根拠になるものは何一つなかった。

研究の観察記録の写しをまだ持っているか、レイチェルに尋ねた。

彼女はコートの内側に触れた。「ええ」

ロイは安堵した。同時に、その記録を持ち続けることは、政府が二人を探すもう一つの理由を抱え続けることでもあると分かっていた。

出発時刻の画面がまた変わった。いくつかの路線が一覧から消えた。隣のベンチに座っていた男が小さく悪態をつき、出口へ向かって歩き出した。

レイチェルはその背中を見送った。今朝は入ることのできた場所が、明日も入れるとは、もう考えられないと言った。

ロイは自分が離れた病床のこと、イマニの警告、そして研究室に戻っていったエイドリアンのことを思った。二人が始めた研究が、次の実験への見通し以上の何かを買い取ってくれていたらと思った。

「研究を失ったわけじゃない」とレイチェルは言った。

「ああ」

「すべてを失ったわけじゃない」

ロイは少しの間、ベンチの背後にある壁に頭を預けた。ガラス屋根の向こうから航空機の音が届かなかったなら、そこで眠ってしまっていたかもしれなかった。

レイチェルは彼の手を取った。

二人は一緒に病院を出た。今は、それがどれほどわずかなことしか保証しないのか理解していた。これからの数時間のうちに、その朝には二人とも考えもしなかったような決断を迫られるかもしれなかった。

ロイは最後の乗客たちが出ていく扉を見た。

二人はもう一時間を手に入れた。

軍があと何時間を許してくれるのかは、分からなかった。

第08章 終。